方言終助詞の分析法を考える

玉懸　元

一　はじめに

かつて方言の終助詞というものは、方言集や方言辞典の項としてごく簡単に取り上げられるか、あるいは各地域方言の（巨視的な）記述研究論文における「文法・語法」といった項目の片隅に細々と取り上げられるばかりであることがほとんどであった。[1]

そうした中、藤原与一は、方言終助詞というものを主題的に取り上げる姿勢を示し、常にそれを主たる関心に置き続けた。[2] その一つの集大成として位置づけられるのが藤原与一（一九八二、一九八五、一九八六）である。

藤原の方言終助詞研究は、沖縄から北海道まで日本全国のそれを対象としていて、取り上げる方言終助詞の数も当然のことながら非常に多い。我々は、藤原の業績によって、日本全国各地にどのような語形の方言終助詞があるのか、その用例文としてどのようなものがあるのかを知ることができ、また、そこにおよそどのような話者の気持ちが込められているのかといったことを垣間見ることができる。が、対象地域を日本全国にとり各地域における方言終助詞を網羅的に取り上げようとすれば、個々の方言終助詞について語り得ることは相対的に少なくならざるを得ない。その結果、個々の方言終助詞の、とりわけ意味・用法に関する丹念な分析・記述は、我々に対して残された課題となっている。

ここで、方言終助詞の「意味・用法に関する丹念な分析・記述」とは、より詳しく言えば、次のような問題を解き明かしていくことである。

（1）ある方言終助詞Fがあるとき、それがどのような用法を持つものであるか――つまり、どのような意味を（結果として）表わすために用いられ得るものであるか。また、そのような用法（用いられ方）を持つに足るような方言終助詞Fの個性（方言終助詞Fそのものの意味）とは、どの

ようなものであるか。さらに、その個性とそれぞれの用法とがどのようにして関連しているか。

こうした問題に答えるためには、方言終助詞というものを主題として、しかも方言終助詞を（網羅的にではなく）一個ずつないし少数ずつ取り上げて論ずる研究――つまり「○○方言の終助詞△△の研究」といった題目を掲げる個別的方言終助詞研究――が必要である。

そのような研究が精力的に行われるようになったのは、ようやく一九九〇年代も半ばに入ってからのことであった。日本語の方言研究の歴史から見れば、最近のこととも言える。

井上優は、井上優（一九九五a）およびその後の一連の研究において、富山県砺波方言の終助詞を網羅的にではなく一個もしくは少数ずつ取り上げることにより、その個々の終助詞の意味・用法を精細に分析・記述してみせた。[3] その後、小林隆（一九九九、二〇〇〇）、渋谷勝己（一九九九a、一九九九b、二〇〇〇）、長澤亜希子（一九九九）、舩木礼子（一九九九、二〇〇〇）など、方言終助詞を個別的に（もしくは少数ずつ）取り上げ、その意味・用法を詳細に分析・記述する研究が着々と行なわれている。[4] これらの個別的方言終助詞研究によって、ようやく（1）の問題に答え得る研究成果が積み重ねられ始めたのである。玉懸元（一九九九、二〇〇〇、二〇〇一、二〇〇二、二〇〇五）等もまた、こうした研究成果の蓄積を一つの狙いとしたものである。

しかしながら、筆者の見るところ（筆者を含めて）いずれの論者も、個々の方言終助詞の分析・記述に一定の成果を収めながら、その一般的手続き（分析の方法論）に当たるものを示し得てはいないように思われる。そこで本稿は、方言終助詞の意味・用法を分析・記述する際の理論的基盤となるだろう幾つかの事柄について論じ、方言終助詞の分析法を構築していくための一助となることを狙うものとする。

二　本稿の論点

方言終助詞の意味・用法の分析では（実は必ずしも方言終助詞にかぎったことではないが）、一般に次のような行程が踏まれると言ってよい。（a）ある方言終助詞の用例を収集・観察し、その用法を整理して記述する（b）それらの用法間の関係を明らかにする（c）それらの用法を直接的・間接的に生み出すに足るような、その方言終助詞の個性（すなわち、その終助詞そのものの意味）を探る。なお、（a）は必ず（b）（c）に先立って行なわれるものであるが、（b）と（c）とは、場合によって順不同となる。つまり、（c）の考察を踏まえて（b）が明らかになる、といった場合もあり得るものである。

さて、このようにして方言終助詞を捉える際の理論的基盤となる事柄として、少なくとも次の3点について論じておく必要があると考える。[5]

（2）①文の意味と終助詞の意味
②終助詞の意味と用法、という術語
③終助詞の意味と用法、その直接的・間接的なかかわり

合い

本稿では、上記（2①②）の事柄を取り上げて論ずることとする。紙面の都合上、（2③）の点に関する議論は次稿以降に譲る。

三　文の意味と終助詞の意味

方言終助詞にかぎらず、終助詞というものについて、我々は、たとえば動詞や名詞のようないわゆる内容語の場合と違って、それそのものの意味を直観的に得ることができない。たとえば「本」という名詞の意味を思い浮かべることと、「よ」という終助詞の意味を思い浮かべることとの間には、それを直観的に得ることができるかどうかという点において決定的な違いがあることは容易に首肯されるところであるだろう（もちろん「本」という名詞の意味をどう説明するかということには議論があり得、それはまた別の問題である）。

終助詞は、常に、文の一部として使われる。終助詞に関して我々が直観的に得るのは、終助詞そのものの意味ではなく、その終助詞が一部として使われて実現した文全体の意味である。

したがって、方言終助詞に限らず、終助詞というものの意味の捉え方としては、まず、文の意味というものの実現の機構、仕方に関して留意しておくべき点があると考える。文の意味として実現したもののうち出所の容易に明らかならざるものを、あたかも掃き溜めにゴミを寄せるように、安易に終助詞の意味と決してしまう誤謬を懼れるのである。

それでは、終助詞の意味について考えるにあたって、文の意味が実現する機構、仕方に関して留意しておくべき点とはどのようなものか。

文の意味というものは、その文中の語それぞれの意味が集まって出来上がるものである――ごく素朴な感覚としては、文の意味の実現の仕方とはそのようなものであろう。これを〈文の意味＝語の意味の集合〉観と呼んでおこう。このような感覚は、必然的に、次のような信仰を産み出す――文の意味は、その全体を分割し、その各々の部分すべてを文中の語のいずれかに還元することができる。これは、今、必然的にと言ったように〈文の意味＝語の意味の集合〉観と切り離せない、いわば表裏の関係となる考え方である。

しかし、文の意味というものはそう簡単な図式によって成り立つものではない。そのことは、もっとも単純な構造を持つ文、すなわち一語文について考えるとき、端的に明らかになる。

（3）雨。

これは「雨」という一つの語からなる文である。たとえば、晴天の日に思いがけず降り出した雨に気付いて驚きとともに口にする「雨。」であったり、日照り続きの期間に農家の人が空を仰いで降雨を待ち望みながら口にする「雨。」であったり、この文の意味のあり方としてはいくつかの場合が考えられよう。

しかし、このように口にする話者のその対象（雨）への驚きないしその対象を待ち望む気持ちといった意味を「雨。」という文の中のどこに還元することができるだろうか。名詞「雨」という語のみから成る一語文であれば、敢えてどこかに還元しようとするなら、名詞「雨」に帰するほかはない。だが、「雨」という名詞の意味と

して〈雨に対する驚き〉や〈雨を待ち望む気持ち〉といった意味を認めようとする向きはないであろう。

雨に対する驚きや雨を待ち望む気持ちといった意味は、予想外に雨が降り出した状況下あるいは降雨を心待ちにしている状況下で「雨」と言葉を発する行為――雨という在・不在の対象に呼び掛ける行為――の中にこそ実現されるものであって、文の中のある語にそのまま還元されるものではない。

一般化して言えば、我々が文の意味として了解するものには、文中の語のいずれに対してもそのままには還元することのできない意味があるのであって、そのような意味が生ずる根拠には、ある状況下である形式を具体的に発するその行為に対して意味を付与する機構があると考えなければならない。

以上のようなことは、一語文を例にとるかぎり自明のことのように思われるかもしれない。先の例に即して言えば、我々は、名詞「雨」の意味を直観的に得ることができる。したがって、一語文「雨。」に〈雨に対する驚き〉や〈雨を待ち望む気持ち〉といった意味が認められるとしても、そうした意味をそのまま名詞「雨」の意味として認めることの無稽さは自明のことだからである。

しかし、一語文でない場合はどうだろうか。たとえば「名詞N＋終助詞F」という構造の文があり、そこに名詞Nには帰すことのできない意味が認められるとき、その意味を終助詞Fの意味であるとただちに断じてしまうことは、いかにもありそうなことである。名詞などの内容語と違って、終助詞というものについて、我々は、そのものの意味を直観的に得ることができない。すなわち、そうした速断を（正当に）妨げる直観を持ち得ないのである。

ここで、議論をやや具体化してみよう。いま、我々が未知の終助詞「ピョ」に出会い、その意味について分析するとしよう。そして「ピョ」の使用者である話者から（4）の用例を得、その意味に関する内省を尋ねたところ（5）のようなものが得られたとする。

（4）雨ピョ。

（5）a・「雨ピョ。」は、急に降り出した雨について、それをいぶかしく思う気持ちを表わした文である。

b・「雨ピョ。」は、降り続ける雨について、それを厭わしく思い、早く降り止むことを願う気持ちを表わした文である。

ここで、終助詞「ピョ」は対象（ここでは「雨」）についていぶかしく思う気持ちを意味するとか、対象に関する厭わしい気持ちを意味するなどとすぐさま結論付けることができるだろうか。

上で述べたように、我々は、終助詞というものについて、そのような速断を妨げる直観を持ち得ない。それゆえ、ともすればそうした議論の進め方をしてしまいそうになる。しかし、それは〈文の意味＝語の意味の集合〉観に基づいた捉え方である。この捉え方は、「雨。」という文において〈雨に対する驚き〉や〈雨を待ち望む気持ち〉といった意味が認められることをもって、それをそのまま「雨」という名詞の意味として認めようとする捉え方と質的に等しい。

終助詞の意味について考えるに際しては、語の意味の集合を超えた文の意味を実現させる機構のあることに十分留意する必要がある。この機構に留意することなく、意識的にせよ無意識的にせよ〈文の

意味＝語の意味の集合〉観に固執するならば、ある文の意味において本来はそのような機構によって生じたところの意味を、その文中の終助詞に（誤って）還元し、その個性を見誤ることになるであろう。[6][7]

データ（5）が物語ることは、ひとまずは、終助詞「ピョ」の使用された文が全体として（5a）（5b）それぞれの意味として実現し得るということのみである。終助詞「ピョ」そのものの意味をそのまま示すものではない。我々が（5）のデータを得てなすべきことは、〈文の意味＝語の意味の集合〉観を脱し、当該状況においてある名詞Nとともに「名詞N＋終助詞ピョ」という形式で使用されたとき、その文がNに対するいぶかしさや厭わしさの表現たる文として成立することに直接・間接に貢献するような、終助詞「ピョ」の個性の如何を問うことである。

四　終助詞の意味と用法、という術語

言葉の「意味」とは何か。「用法」とは何か。言語の学が哲学から独立する以前から古く議論されてきたこのような問題については、なお見解の一致が見られるとは言いがたい。ここでは、終助詞の「意味」と「用法」とはいかなるものであるか、ということについて論述する。

四・一　終助詞の意味と終助詞を用いることの意味

終助詞の「意味」と「用法」という術語について述べるにあたって、まず検討しておきたいことは、「ある終助詞そのものの意味」と「その終助詞を用いることの意味」との違いである。後者の「意味」は「意図」ないし「目的」などといった言葉で言い換えが可能な場合もある。が、必ずしもそのような言い換えが妥当とは言えない場合もあるので、敢えて「意味」のままとし、ここでは、前者の「意味」には「M」とアルファベットの大文字で添え、後者の「意味」には「m」と小文字で添えて適宜区別することとする。

さて「ある終助詞そのものの意味M」と「その終助詞を用いることの意味m」との違いを、次のようなたとえ話をきっかけとして考えてみたい。

ここに、リンゴというモノがある。リンゴは、ナシでもなくブドウでもなくはたまたマンゴーでもなく、まさに〈リンゴであること〉を本質として存在する。だが、次のような場合はどうだろうか。

ある人物Aがリンゴ農園の経営者Bに殺された。Aは、死ぬ間際に手近にあったリンゴに手を伸ばし、それをつかんだまま絶命した。それは、Aが最期の力を振り絞って遺したダイイングメッセージ（dying message）であった。Aは、自らがリンゴをつかみながら絶命することによって、リンゴ農園の経営者Bが犯人であることを示唆しようとしたのである。AとBとの間の激しい確執は日頃から人々の広く知るところであり、Aのこのような仕方によるメッセージは十分周囲に伝わり得るものと考えられた。事実、後日Aのこのメッセージは捜査陣によってその意図の通りに解釈され、それを一つの重要なきっかけとしてBは逮捕されるに至ることとなる。

こうした場合、リンゴは〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であるこ

と〉を示す印となったわけである。しかし、このような印としてAがリンゴをつかんだことは「Aとリンゴ農園の経営者Bとの間に日頃から激しい確執があった」「そのことが周囲に知れ渡っていた」といった諸々の状況によって支えられながら成立したリンゴの用い方――すなわち（この場合はあくまで臨時的なものではあるが）用法――の一つであって、それがそのままリンゴの本質そのものとして位置付けられるものでは、もちろん、ない。

つまり、あくまでもリンゴは〈リンゴであること〉を本質とするものであって、リンゴによって〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉を示し得たからと言って、それを示すことがリンゴの本質そのものではありえない。

ただ、そうは言っても、リンゴがそのようなことを示す印となり得たことは、リンゴそのものの本質と無関係ではない。Aがリンゴというモノをもってしてそうしたことを示し得たのは、諸々の状況による支えがあったことによるばかりではなく、根本的には、Aのつかんだそのモノがまさにリンゴであったからこそ――より厳密に言えば〈リンゴであること〉を本質とするモノであったからこそ――のことである。もしも、Aのつかんだそのモノの本質がたとえば〈ナシであること〉〈ブドウであること〉〈マンゴーであること〉などであったとしたら、Aのつかんだそのモノは、諸々の状況の支えがあったとしても〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉を示し得はしなかったであろう。

さて「ある終助詞そのものの意味M」と「その終助詞を用いることの意味m」との違いもまた「リンゴが本質として〈リンゴであること〉」と「それを用いて〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉を示したこと」との違いになぞらえて捉えられるものと考える。

すなわち、このたとえ話における、リンゴの本質〈リンゴであること〉は、「ある終助詞そのものの意味M」に対応するものである。また一方、Aがリンゴを用いて〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉を示したことは、「その終助詞Fを用いることの意味m」に対応するものである。

ある終助詞Fには、そのFとして本質的なある意味Mが刻まれている。あるいは、その終助詞Fはその意味Mを有することをもってその本質とする。リンゴが〈リンゴであること〉をその本質とするのと同様である。

ある状況下でその意味Mを有する終助詞Fを用いることの意味mは、Fの本質的な意味Mそのものではない。リンゴ農園の経営者Bとの間に日頃から激しい確執があり、それが周囲に知れ渡っていたといった状況下で、Bに殺され死ぬ間際にAがリンゴをつかんだことの意味、すなわち〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉が、リンゴの本質そのものではないのと同様である。

ただし、そうは言っても、ある終助詞Fを用いることの意味mとその終助詞そのものの意味Mとは、無関係ではありえない。この後者は、前者の成立に直接・間接にかかわっている。Aのつかんだそのモノがまさに〈リンゴであること〉を本質とするモノであったからこそ、〈リンゴ農園の経営者Bが犯人であること〉を示し得たのと同様である。

以上、ここでは、リンゴに関するたとえ話になぞらえる形で「あ

る終助詞そのものの意味M」と「その終助詞を使うことの意味m」との違いを述べた。

四・二　終助詞の意味と用法、という術語

ところで、以上に述べたような「ある終助詞そのものの意味M」と「その終助詞を使うことの意味m」とは、終助詞の「意味」と「用法」という術語のあり方にも密接に関連している。

終助詞というものの用いられ方は（実は必ずしも終助詞にかぎったことではないが）一般に多岐に渡る。単一の用法しか持たない終助詞というものは、おそらく、ないだろう。それは、言い換えれば、終助詞というものは、さまざまな状況下でさまざまな意味m1、m2、m3……を結果として（文全体として）実現する際に用いられるものである、ということである（しかし、もはや繰り返すまでもなく、この結果的に実現する意味m1、m2、m3……は、その終助詞そのものの意味Mではない。それは、ある状況下である終助詞を用いることの意味mである）。

ある終助詞の「用法」としていかなるものがあるかと問うとき、それは、その終助詞がどのような状況下でどのような意味m1、m2、m3……を、その文全体で実現する際に用いられるものであるかということを問うていることに等しい。

また、ある終助詞の「意味」とはいかなるものであるかと問うとき、それは、かような状況下においてかような意味m1、m2、m3……を、その文全体をして実現せしむることに直接的・間接的に貢献するような、その終助詞の本質（これを「個性」と言い表すこともある）とはいかなるものであるかと問うているに等しいものである。

以上、本節では「ある終助詞そのものの意味」と「その終助詞を用いることの意味」との違いを検討し、それを踏まえて、終助詞の「意味」と「用法」とはいかなるものであるか、について述べた。

五　まとめと今後の課題

以上、本稿では、方言終助詞の意味・用法を丹念に分析・記述していく際の理論的基盤となる事柄として、次の二点について論じた。

（2）①文の意味と終助詞の意味（3節）

②終助詞の意味と用法、という術語（4節）

取り上げた問題の性質上抽象的な議論に偏りはしたものの、意識的にせよ無意識にせよ〈文の意味＝語の意味の集合〉観に固執するあまり、その終助詞の個性を見誤っているように思われる論考、あるいは、終助詞の意味と用法との区別に無反省であるがゆえにその両者を混同し、やはりその終助詞の個性を見誤っているように思われる論考が散見される現状において、いささかなりとも有意義な議論となったものと信じる。

ところで、本稿では、終助詞の意味と用法というものがどのような関係にあるか、ということについては、

・両者は無関係でない。

・前者は後者の成立に直接・間接にかかわるものである。

という以上に具体的なところを述べ得ていない。すなわち、

（2）③終助詞の意味と用法、その直接的・間接的なかかわり合い

という問題について具体的に論じていない。この点をめぐって、具体的に検討することが、次稿以降の課題である。

註

（1）方言終助詞の分析法を考えるに際して、方言集・方言辞典や巨視的観点による記述研究論文（各地域方言について、その音韻体系・文法体系・語彙体系などを広く見渡し、記述した論文）において方言終助詞がどのように取り上げられてきたかについても具体的に見ておく価値がある。それを目的とした別稿を準備中である。

（2）ただし、藤原は「終助詞」という術語を採らず「文末詞」（ある一時期は「文末助詞」）と呼ぶ。また「終助詞」と藤原の「文末詞」との範囲は、大部分において重なりつつ必ずしも一致しないが、本稿ではそうした細部には立ち入らないこととする。

（3）井上優の試みは、現代日本語の共通語研究等において、いわゆる談話文法・語用論といった文以上の単位を扱う（広義）文法論への関心が高まり、それに伴って従来扱いづらかった品詞類（終助詞・感動詞など）の個々に対する分析・記述が積極的に行なわれるようになったという動向とも無関係ではなかったと思われる。

（4）もっとも、それぞれの論者によって、方言終助詞を個別的に論ずることによる将来的な目標には違いがあるのであって、したがって、これらを井上優の個別的方言終助詞研究に棹さすものとして単純に位置付けるわけにはいかないのだが、個別的方言終助詞研究というものが盛んに行なわれるようになったことは、事実として認めてよいであろう。

（5）この3点は、実は方言終助詞にかぎらず、日本語の終助詞全般を捉える際の心構えとして重要と考えられるものである。その意味では、本稿は「終助詞の分析法を考える」という、より一般的な題目を掲げてもよい性格のものである。

（6）ここでは、〈文の意味＝語の意味の集合〉観の不備と、語の意味の集合を超えた文の意味を実現させる機構の存在とを指摘するに留め、その機構の内実については深く立ち入らない。が、一言だけ述べれば、「雨。」のように名詞資格（「雨。」の場合は名詞そのもの）の、言語表現として原始的な――つまり、無標の――形式を発話として具体化した場合、もっとも典型的には〈①その存在を何らかの感動とともに認める気持ち〉ないし〈②その不在なる何ものかについて存在を願う気持ち〉を込めた文として実現する。これは、山田孝雄の言う感動喚体と希望喚体という、喚体句成立にかかわる機構（筆者の考えとしては実は述体句を含めてすべての句にかかわる成立機構）でもある。

（7）脇道にそれるが、このような指摘は、必ずしも終助詞研究にとってのみ有用なものではないかもしれない。というのは、一九八〇年代から始まる「モダリティ論」の大勢における行き詰まりも、このような認識の不足が一つの原因であるように思われるからである。そこでは、たとえば「シナイカ」という形式が「勧誘」の意味を持つかのように記述される。しかし、否定疑問形「シナイカ」の用いられた文が勧誘の機能を果たし得るということと、「シナイカ」自体が勧誘の意味を持つということとは次元の違う事柄である。

【文献】

井上　優（一九九五a）「方言終助詞の意味分析――富山県砺波方言の『ヤ／マ』『チャ／ワ』――」『国立国語研究所報告一一〇研究報告集一六』国立国語研究所

井上　優（一九九五b）「富山県砺波方言の終助詞『ゼ』の意味分析」『東北大学言語学論集』四　東北大学大学院文学研究科言語学研究室

井上　優（一九九八a）「方言の終助詞の意味――富山県砺波方言を例に」

『言語』二七―七　大修館書店
井上　優（一九九八b）「富山県砺波方言の終助詞『ジャ』の意味記述」国立国語研究所『日本語科学』編集委員会／編『日本語科学』四　国書刊行会
井上　優（二〇〇二）「方言終助詞の記述研究のために」『日本語学』二一―二　明治書院
井上　優（二〇〇四）「方言の終助詞が伝えるもの――富山県砺波方言の『ネー』の場合――」『日本語学』二三―一〇　明治書院
小林　隆（一九九九）「種子島方言の終助詞『ケル』」黒田成幸・中村捷／編『ことばの核と周縁：日本語と英語の間』くろしお出版
小林　隆（二〇〇〇）「文末形式『ケ』」小林隆／編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
渋谷勝己（一九九九a）「山形方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』一　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
渋谷勝己（一九九九b）「文末詞『ケ』――三つの体系における対照研究――」『近代語研究』一〇　武蔵野書院
渋谷勝己（二〇〇〇）「山形市方言における文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』二　大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
玉懸　元（一九九九）「仙台市方言の『ベー』の用法」『言語科学論集』三　東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
玉懸　元（二〇〇〇）「終助詞『ッチャ、サ』」小林隆／編『宮城県仙台市方言の研究』東北大学大学院文学研究科国語学研究室
玉懸　元（二〇〇一）「宮城県仙台市方言の終助詞『ッチャ』の用法」『国語学』五二―二（通巻二〇五号）国語学会
玉懸　元（二〇〇二）「仙台市方言の『ベー』の用法（二）――『推量』『確認』『確認要求』の用法をめぐって――」『国語学研究』四一「国語学研究」刊行会
玉懸　元（二〇〇五）「文末形式と談話構造」『国語学研究』四四「国語学研究」刊行会
長澤亜希子（一九九九）「秋田方言の終助詞『ケ』について」秋田県教育委員会／編『秋田のことば』無明舎出版
藤原与一（一九八二、一九八五、一九八六）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究　上・中・下』春陽堂
舩木礼子（一九九九）「山口方言の文末詞『イネ』について」『阪大社会言語科学研究ノート』一　大阪大学大学院文学研究科社会言語科学研究室
舩木礼子（二〇〇〇）「引用表現形式に由来する文末詞の対照――山形市方言ズ、山口方言チャ、東京方言ッテ・ッテバについて――」『阪大社会言語科学研究ノート』二　大阪大学大学院文学研究科社会言語科学研究室

（文学部講師）